

花園大学
日本文学科

通信

第12号
通巻40号

二〇一九（令和元）年六月十四日発行
編輯・発行 花園大学文学部日本文学科
〒604-8456 京都市中京区西ノ京壺ノ内町八、一
電話（〇七五）八一・五一八一代
振替 〇一〇五〇・一・四三九九五

御挨拶

下野 健児

昨年度に引き続き、今年度も日本文学科の主任を務めさせていただいております。下野です。よろしくお願い申し上げます。

さて、日本文学科は今年度、秦美香子先生を専任准教授としてお迎えいたしました。先生のご専門はマンガ研究で、本学科では新たに設けた現代文化に関わる授業をご担当いただいております。昨年度お迎えした高橋啓太先生（近現代文学）に加え、今回秦先生に入っていたいただきましたので、専任教員が橋本行洋（日本語学）、下野（書道）との四人体制になり、平均年齢がより下がりました。秦、高橋のお二人の先生に加わっていただいたことで、日本文学科にもフレッシュな風が入り、新たな時代を迎えようとしています。また、特任教授として新聞水緒先生（中世）、曾根誠一先生（中古）には、引き続き講義、ゼミを精力的にご担当いただいております。

書道コースでは、引き続き客員教授として真神巍堂先生（卒業制作担当）、囑託教授として森田彦七先生（漢字）、日比野実先生（かな）に書道実技を担当していただいております。

今年度日本文学科の定員数は、大学当局の構想により昨年度より十名増えて六十名となり、定員を確保できるか心配しておりましたが、予想をはるかに越えて九十名を越える新入生を迎えることとなりました。しかし、このような状況が今後も続くとは思えません。今後も入試課などと協力し、オープンキャンパス、出張授業などの機会を通して、受験生に花園大学文学部日本文学科をアピールしていきたいと思えます。また、入学していただいた学生諸君に対しては、花大の日本文学科を選んで良かったと思っていただけるように、しっかりとサポートしていこうと思っております。

学生確保に関しては、今後もきびしい状況が続くとは思われますが、日本文学科を盛り立てるべく、教員一同、新たな体制で頑張っておりますので、今後ともご指導ご鞭撻くださいますようお願い申し上げます。

でございますよう、よろしくお願ひ申し上げます。
（本学教授）

花園大学日本文学会 公開講演会

（聴講無料）

日時 二〇一九年七月六日（土）

午後一時三〇分～四時四〇分

会場 花園大学 自適館三〇〇教室

講演

人文学的アプローチによる

ビデオゲーム研究

花園大学 准教授 秦美香子

鴨長明の旅路

―『方丈記』と『発心集』―

花園大学 教授 新聞水緒

ご挨拶

秦美香子

本年度より、日本文学科准教授に就任いたしました秦美香子と申します。私はこれまで、花園大学文学部創造表現学科に所属してまいりました。もしかしたら、日本文学科の卒業生の方で、私の授業を受講してくださっていた方もおられるかもしれませんね。

私の専門はメディア研究や文化の研究で、これまで主にマンガ・アニメ・雑誌の言説分析や、ファンの方を対象にした調査を行ってきました。とくに、フィンランドで日本のマンガやアニメを愛好する人々にインタビューをしたり、現地で開催されているファンイ

ベントの調査を行ったりしてきました。

今年度からは新たに、マンガと舞台芸術の間で行われるアダプテーションに注目した研究を始めました。アダプテーション論は、作品が別のメディアに翻案されるとき、その表現や作品に込められたイデオロギーがどのように変更されたり別の形で再現されたりするのかに注目して行われる議論を指します。これまで文学研究の中では、文学作品の映画などへの翻案を分析する際に用いられてきました。私が取り組んでいる研究では、従来のアダプテーション論がほとんど触れてこなかったマンガやミュージカルという表現様式に光をあてて、マンガと舞台では表現がどのように違うか、違っていても同じ作品だと観客が感じるのはなぜか(どのような表現要素によって、そのような印象を生み出しているのか)、というようなことを考えています。

皆さんにおススメしたいマンガ作品をひとつご紹介して、ご挨拶を終わることにします。スペインの作家、パコ・ロカの『罅』(ShoPro Books、二〇一一年)です。主人公のモデルは作者のお父さんなのですが、この主人公や、主人公の入った老人ホームの入居者たちの認知症が徐々に進行していく様子を、見事にマンガ形式で描いています。哀しく、辛い気持ちにもなる物語なのですが、認知症の方の心のありようを巧みに表現しており、非常に優れたマンガ作品だと思います。ぜひ読んでみてください。 (本学准教授)



(パコ・ロカ著、小野耕世・高木奈々訳 『罅(ShoPro Books)』小学館集英社プロダクション)

歳月夢の如し

新聞水緒

卒業生の皆様、お元気で過ごして下さいますか？ 気付いてみたら、前回執筆時から、いつの間にか十余年の歳月が流れていました。お久しぶりですと申し上げると同時に、今回は教員としてお別れの言葉を述べる機会になりました。私儀、本年度末を以て退職いたします。

花園大学に赴任したのが平成二年四月一日です。平成の終わりの本年度でちょうど三十年目、まさに平成の時代を花園大学で過ごしたことになります。その間、大学をめぐる社会情勢はめまぐるしく遷り変わり、大学・学科にも様々なことがありました。この機会に、少し振り返ってみたいと思います。赴任したころはバブル経済の真っ只中、学生数も多く、賑やかでした。第二次ベビーブ

ームの時は臨時に定員を増やすことになり、担当する中世文学のゼミでもゼミ生が二十五人を超え、審査する卒論の本数が四十本近くという年もありました。卒業生の就職は順調でしたが、バブルがはじけると様相は一変、わずか一年の違いでゼミ生が就職難に直面しました。今でもあの時のゼミ生たちのことが気に懸かっています。やがて少子化やゆとり教育の影響が大学にも及び、大学も学科も変化を余儀なくされつつ、今日に到っています。変化に対応するため、従来の国文学と書道のコースに、マンガやアニメなどの新しい分野を加え、一時は三分の二弱の学生が新コースに属した年もありました。それを受けて新しい学科が創設されましたが、それも昨年度をもってその役目を終えました。もともと芸術創作系の大学ではなかったことや、卒業後の進路問題など、難しい側面があったのでしよう。

この三十年、学科をめぐる状況は様々に変わりましたが、「古典・近代の文学作品や国語(日本語)学の資料を読み、理解し、考える学生を育て、書道教育の充実を図る」という、国文(日本文学)学科の創立以来の基本的教育方針に、大きな変化はなかったと思います。あと四年もすれば、大学・学科を廻る状況は、また変わることでしよう。これからも、「理解し、考える学生を育て」、希望にそった場所で活躍できるように学生を送り出せる日本文学科であって欲しいと願いつつ、筆を擱きたいと思えます。 (本学特任教授)

ご縁に感謝

伏岩 愛

私は現在、小学校で特別支援学級の担任をしています。正直な話、この現状は子どもとふれ合うのが苦手だった大学生の頃の私には考えられないことです。子どもにも、障がいがある人にも、どのように接すればよいかわからなかったのです。それでも今、障がいがある子どもたちと笑顔で学校生活を送ることができてるのは、これまでに出会ったすべての人たちのおかげだと思っています。

私の大学生活といえば、第一に書道(講義は苦手)、第二に書道部、第三にバイトという、大学にすることが基本ともいえるものでした。今思えば、海外に行ったり、休みの日にはショッピングをしたりと自由気ままな大学生活を送ることもできたと思います。しかし、「書くことが好き」という気持ちだけで4年間作品に向かい、夏休みも守衛さんに直心館を開けてもらい、一人で作品を書いている生活を続けました。なぜなら海外旅行よりショッピングより「好きなことを好きなだけ頑張ることが大学に入学時に決めた私のこだわりだったからです。

ただ、一人きりで作品に向かうことができたわけではありません。そばには必ず、助言をくれた先輩、ご飯に誘ってくれた先輩、いざというとき今でも必ずそばにいる友人、有難いことに私を慕ってくれた後輩、父のような先生がいました。さらには展覧会で個人的に

言葉をかけてくださるお客様もいました。周りからすれば大したことがないことでも、よく悩んだり落ち込んだりしていたので、その人たちがいなければ、自分に自信が持てずに好きなことに打ち込むことも知らない大学生活になっていたことでしょう。

社会に出てから、人と人とのつながり、ご縁の大切さが身に染みて感じられるようになりました。学生の頃に学んだ書道と、人と人が、未だに自分の中の軸となっていて、誇りとも言えます。これまでのご縁に感謝します。(二〇〇九年度卒業生)

抒情

内田 陽菜

思えば、国語の教科書をペラペラと捲った中の一つの詩に引き込まれ、近代文学に興味を持つてから随分と経った。

花園大学での学びは、人生の糧になったと強く思う。文学の講義は勿論、花園大学特有である禅の授業においても、受ける前はただ座るだけだろう、と思っていたが、小鳥の囀りや風の音がこんなにも大きく感じた事は初めての経験だった。他にも、京都市キャンパス文化パートナーズ制度を利用して無料(もしくは割引)で美術や文化に触れ、研究の為に遠く離れた地へ旅行に行き、大学生活の間で経験を沢山培う事が出来た。

大学での学びは、このような研究をきっか

けに新たな発見をしたり、講義の中にある、まだ論文として発表されていない所謂先生の「無駄話」に興味があると思う。一瞬目に映ったものや話が、自分の視点や人生を大きく揺さぶるかもしれない。

事実、私は講義の中で人生を見つめ直した事があった。四回生になり、周りには内定先が決まりスーツを脱いでいく中、やりたい事が分からず焦りを感じていた頃だった。ディスカッションの中で就職の話題になり、様々な意見が出る中、先生は一貫として「同調圧力に押されてはならない」という姿勢だった。卒業後は就職する事が当たり前だと思っていた考えを打ち砕かれたのである。

そして現在、私は先生の紹介で花園大学の日文共同研究室へ週に一度、室員として在籍している。やはり文学を学び続けたいという気持ちと諦められなかったのだ。先生には感謝の言葉しかない。日々業務を進めつつ、書庫に収納された膨大な文献を読み進めている。だが、毎日研究雑誌が届く中で利用者は片手に収まるほどである。文献収集の際など、学生の方はどんどん活用してほしい。

所謂「普通の」選択をしなかった私だが、敷かれたレールに沿う必要はない。現に母は五十歳近くして転職し、新入社員として働いている。今年元号が変わり、変わっていく時代になると思う。大学での学びを経て、多くの人に多くの道ができる事を切に願う。

(二〇一八年度卒業生・日本文学科共同研究室員)

花大再訪

宇田 丈宏

この春、花園大学を卒業して二十五年が経った。その間に勤めた職場の転勤で京都を離れ東京、名古屋、福岡と移り住み、最後は日本各地を巡らせてくれた職場も変わって数年前に京都に戻ってきた。

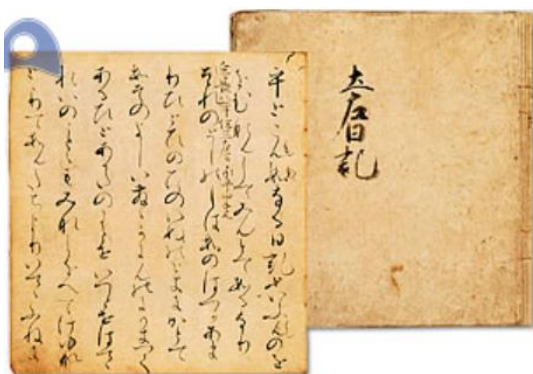
住む街が変わることには抵抗もなく、住めば都の性格でどこでも楽しく仕事もプライベートも充実した毎日を通り過ごすことができたとと思う。それでも京都に帰ってくる時やはこの居心地よく思ってしまうのは古くからの友人がいるからか、それとも少し歳を取ってしまったからか。人生を振り返るのはまだ早い、昭和生まれとしては平成・令和と二度の改元を経験し、年齢を意識させられた春であった。

卒業から今日まで京都を離れることがあっても幸運なことに恩師の曾根誠一先生とは今も年に何度かお会いする機会に恵まれている。先生を肴にゼミで一緒だった同級生や先輩方と会って話すのも学生時代に戻ったようで楽しい一時だ。ただ曾根先生にお会いするのは河原町などで花大にはほとんど足を向けることはなかったが、一昨年久しぶりに訪れてみた。目的は花大が毎年開講している京都学講座で曾根先生が『土佐日記における『旅』』と題して講演されるのを拝聴するためだ。『土佐日記』は学生のころ講読の授業でも学んだが、あの頃中々理解できなかった

ったのがうそのように、時には冗談も交えお話しただく内容は非常に分かりやすく興味深く拝聴することができた。

そしてもう一つ驚いたことがあった。受講されている方の多かったことだ。学生もいることはいたが圧倒的に一般の方が多く随分大学が開かれているイメージを持った。中には常連なのか受付の方と気さくに談笑している方もいた。なんだか卒業以来大学に来なかったことが勿体なかったような気持ちになった。母校は卒業しても縁遠き所にしてはいけない。久しぶりに訪れた母校はやはり私には一番居心地のよい学び舎だった。

(一九九三年度卒業生・梅田芸術劇場勤務)



(大阪青山歴史文学博物館蔵・為家本『土佐日記』)
※同館ホームページ掲載写真による。

『花園大学日本文学論究』第11号

・同一下絵による

『竹取物語絵巻』図絵の検討

曾根 誠一

・古本説話集 本文と注釈

― 上巻第一話 大齋院事 ―

新聞 水緒

・【研究ノート】

梅崎春生「侵入者」と

戦後日本の住宅事情 高橋 啓太

・受贈図書目録

(二〇一七年一〇月〜二〇一八年九月)

◇入手希望の在学生は、共同研究室(日本文学・書道)まで申し出てください。

◇購読をご希望の方(卒業生・一般)は、花園大学日本文学科あてにご連絡ください。

編輯後記

◆「年号」と「元号」では、「元号」が正式名称だそうですが、やはりどうしても(主権在君)の香気が漂います。(Y)

◆学生たちは、「いなく」も「よなきそば」も聞いたことがないという。大阪出身者が「そごう」も「横山ノック」も知らない。時節の移ろいの速いことよ。(Y)